

NEWSLETTER
VOLUME 78
2026

SOUNDINGS



会長就任挨拶	2
英語英米文学随想	3
ワークショップ報告	5
会員著作紹介	7
編集後記	8
事務局より	9

「楽しさ」や「面白さ」があることを実感できる場

杉木良明（上智大学）

このたび会長を仰せつかりました。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

今から何十年も前、まだ院生だったころ、文学研究をとりまく状況は、現在とは大分違っていました。文学系の学会は活況を呈し、サウンディングズも今よりもっと賑わっていたように記憶しています。研究会は年に2回開かれ、研究発表には2部屋があてられていました。会報も年2回発行されていました。会誌への論文投稿もいまより本数が多かったように思います。院生も今よりも格段に多くいました。

現在は、研究会は年1回、研究発表もひと部屋だけという年も少なくありません。会報の発行も年1回になり、会誌も投稿論文以外の文章が掲載されるようになりました。研究発表希望者や執筆希望者が減ったことも原因のひとつで、院生の数が減って世間同様高齢化が進んでいるからだという声も聞こえてきます。研究会や会報が年1回になったのは、経費削減という喫緊の要請もあったからでもあります。この要請は現在も続き、会報は今後紙に印刷して郵送するのではなく、ウェブ上に掲出することになりました。

ここまでお読みになった方は、状況を悲観的に受け止められるかもしれません。だがそうでしょうか。ポジティブな面も多々あるのではないのでしょうか。このような状況では、執行部は当然活性化を図ります。たとえば研究会時に開催されるシンポジウムでは従来にないユニークなトピックが選ばれていることが挙げられます。近年ではスポーツや音楽が

採り上げられました。スポーツは新たに数本の論文を加えて『スポーツする英語文学』として書籍化されました。音楽についても書籍化が計画されていると聞いています。

会誌にしても、以前は投稿論文だけでしたが、現在は投稿の対象に「研究ノート」や「書籍紹介」も加わっています。またベテランの研究者に懇談論文をお願いして書いていただくこともあります。これが意味するのは、1冊の会誌で、多様な種類の読み物を「楽しむ」ことができるということではないでしょうか。

会報がウェブ上で公開されるのも、経費節減がきっかけだったとは言え、より多くの方に、サウンディングズという場が英語文学・英語学研究の「面白さ」を共有できる場だということを伝えるよいチャンスなのかもしれません。

翻って考えてみれば、なぜ我々が研究者を志したのかと言えば、そもそも物語を読むことが楽しいからであり、言葉について考えるのが面白かったからではないでしょうか。真摯に研究に取り組むには、たゆまぬ努力も必要だとは思いますが、ただ、サウンディングズは、その根底に「楽しさ」や「面白さ」があることを実感できる場であってほしいと願っています。

微力ながら会の運営の一助になりたいと存じますが、皆様のお力添えを必要とするときも多々あろうかと存じます。種々ご協力給われればありがたく存じます。

中世英文学研究 — わたしの原点

下永裕基（明治大学）

先日、久しぶりに指導教授故・渡部昇一先生（2017年帰天）の書庫を訪ねる機会があった。英語文献学・言語学の専門書だけで約9000点（ただし2001年制作の目録による数字だから、その後さらに増えたはず）、その他の稀覯書・一般書籍・雑誌を含めると15万点とされる先生の蔵書はそのまま残されていた。ご遺族によると書庫内のデスクも、先生が最後に作業をなさったときのままといい。唯一、先生の遺影が置かれている点だけが昔とちがう。生涯をかけて愛した書物とともに先生の魂が今もあるのを感じた。

初心に帰った心持ちになった。書物を愛すること。ことばを愛すること。それらをとおして見えてくる人間の姿に敬意をはらうこと。研究はその延長線上にある。渡部先生だけでなく、わたしが学部生時代、大学院生時代にお世話になった先生方は皆、英語学と英文学のあいだに境界線をひいたりしなかった。サウンディングズが「英語英米文学会」と称するのもその良き伝統だと思う。

近年、日本の古英語研究の動向をみていると、若手・中堅の研究の大半は語形や語順を対象としたデータの収集・分析が主流である。皆が文学を志すわけではないし、中世の文芸の理解にはキリスト教文化の壁が立ち上がるし、なにより言語学にはさまざまな分野があるからしかたがない。精緻な理解を可能にするために語形などの基礎研究が必要なことも理解できる。しかし同じ中世でも中英語研究にはまだ文学の香りがする。データ分

析型の古英語研究からはどうも人間の姿が見えてこない。お叱りを受ける覚悟で書くなら、受験勉強時代のデジャヴに思えてしまうのだ。

高校時代の英語学習といえば語彙を増強し、論理力を鍛え、難解な英文を黙読して正答を見つけ出す訓練に明け暮れた。大学に入り、英文科で待っていたのは英語を味わう世界だった。韻律なるものを知って詩を音読してみたり、さっぱり分からぬMoby-Dickに必死にかじりついたり、OEDが教えてくれる意味の歴史にときめいたりする中で、英語はわたしにとって解読すべき暗号から味わうべきことばへと変わっていった。

だから古英語も、響きを大切に音読し、気に入ったものは暗唱したい。当時の読み手、聞き手が興奮したであろう場面に自分も共感したい。そうして得られる喜びを研究者同士で分かち合いたい。

中世の書物は手写本である。羊皮紙のうえに写字生がインクで1文字1文字書きつらね、高価なものではそこに挿画や彩色が施され、最後の製本作業に至るまですべてが職人技であった。聖書写本1冊をつくるための羊皮紙の調達に、羊は何百匹必要だったことだろう。今日のように駄文でも容易に公開できる時代ではない。**読むべき価値**のあるもの、後世に**残す価値のある内容**だけが写本の形にまとめられたはずである。

さらにいえば、そうした写本が現存するのは奇跡的である。中世のヴァイキング時代、

近代ではイギリス宗教改革の初期に、多くの修道院が破壊と掠奪に遭い、そこで数知れぬ写本が永遠に失われたからだ。戦災もあっただろうし、コットン蔵書のように書庫の火災で焼失したものもある。そうでなくても保管状況によっては湿度や紫外線の影響、虫害や鼠害などで損傷を受けるのが古文書である。古の書物の中身が活字となり、このわたしの手許にまで届くご縁に、わたしは畏敬の念すら抱く。研究の合間に、恩師の文章を読み返すことがある。最近も、ある訳書のあとがきに思わず笑みがこぼれた。渡部先生も若かりし頃、当時の言語学の潮流に対し「意味を扱わない言語学とは…それこそ無意味なのは」という思いを抱かれたというのである。これだ！と思った。

恩師の書庫を後にするとき、背中を押されたような気がした。「書痴」と自称された先生のように壮大なコレクションをもつことはとうてい真似ができないが、先生が書物に接するお姿にわたしも倣いたい。それがわたしの原点だと思う。

ワークショップ報告①

講師：舟川一彦先生（上智大学名誉教授）

テーマ：読解教材をつくる－W. E. グラッドストンの「書物とその収蔵について」からの一節を例に

日時：2025年9月13日（土）15:00-17:00

会場：上智大学四谷キャンパス7号館4階文学部共用室A

浦口理麻（東京学芸大学）

2025年9月13日土曜日、上智大学四谷キャンパス7号館4階文学部共用室Aにて第3回目となる舟川一彦先生のワークショップが行われました。参加者が取り組んだのは、19世紀の政治家ウィリアム・グラッドストンが書物とその収蔵方法について語ったエッセイを用いて、英文科の読解教材を作成する作業です。

ワークショップの前半で取り組んだのは、この文章に初めて触れる学生のために導入文を作成する作業です。参加者からは、グラッドストンがどのような時代にどのような活動をしたのかを示す必要があるとの意見が上がり、首相を四度務めたこと、最初は保守党に属していたものの後に自由党に転向したことなど、彼の政治家としての経歴に触れる必要があることを確認しました。しかし、今回のエッセイにおいて重要なのは文化人としてのグラッドストンであるため、導入文の最初の段落では「グラッドストンは著名な政治家であると同時に、文化人としても重要な役割を果たした」という点を強調する必要があるという結論に至りました。

「文化人としてのグラッドストン」は、教材の対象となる学生だけでなく、参加者にもなじみがないテーマのため、ここで舟川先生から、グラッドストンと本や図書館の関係について説明がありました。彼が個人で築いた書庫は一般人にも開放されていたこと、公共の図書館の整備に尽力したこと、そして、番号での本の分類がまだ一般的ではない時代に、独自のやり方で本の分類を行っていたこと、これらの説明を受け、導入文の第二段落

で、グラッドストンが図書館の発展に貢献したことについて触れるべきだと全体で確認しました。そして最後に、エッセイ全体の内容（現代の図書館学に通じるもの）と今回の課題の箇所（図書館の歴史）の位置づけについて説明する内容を第三の段落に含めることを確認しました。その後先生が作成された導入文の例が配布され、全員で確認をしました。

ワークショップの後半では、題材となった箇所を一文ずつ丁寧に確認し、語句や文法の確認に加え、どこに注が必要かを話し合いました。単語の意味の確認にとどまらず、関係詞や仮定法、名詞の複数形の意味といった文法事項についても確認しました。さらに、そこに歴史的な知識なども交え、文章をより正確に読み解くことを試みました。この作業を通じて、文法の確認作業と歴史的な知識の両方がそろって初めて正確な読解が可能になることを改めて確認できました。

ワークショップの最後には舟川先生作成の模範訳が配られました。導入文も模範訳も、今後の授業運営の参考になる資料でした。また、今回の模範訳は逐語訳ではなく、より自然な翻訳に近い形になっており、ワークショップ後に自分の訳と照らし合わせることで、文法事項の確認だけでなく、日本語としてのより自然な表現方法についても学ぶことができました。2026年のワークショップでの新たな学びを楽しみに、ワークショップは終了しました。

ワークショップ報告②

講師：巽孝之先生（慶應義塾大学名誉教授・慶應義塾ニューヨーク学院学院長）

テーマ：映画のテキスト

日時：2026年3月13日（金）15:00-17:00

会場：上智大学四谷キャンパス10号館323教室

深谷公宣（法政大学）

2026年3月13日（金）、春季ワークショップとして巽孝之先生の講演が行なわれた。演題は「映画のテキスト」。教材は先生が監修した『映画で読み解く現代アメリカ2 トランプ・バイデンの時代』（明石書店）である。ご自身も『マトリックス』論を寄稿し、同三部作を再考、第四作『マトリックス・レザレクションズ』（2021）（以下M4）を論評している。

“Towards the Politics of Cyber Picturesque”と題する年表に沿った講演では、『マトリックス』前史から同作品群の養分が明かされた。鍵語は「廃墟」である。前史を遡れば1964年東京五輪時の新幹線・首都高整備がまず注目されるが（M4にも新幹線車内の銃撃シーンがある）、1955年生まれの前先生は首都高建設の記憶から建設現場／廃墟像の判別しにくさを2020年東京五輪（2021年開催）を予言したとされる『AKIRA』を例に語り、ウィリアム・ギブスン論を展開された。『マトリックス』の原型『ニューロマンサー』のケースの如き「アウトロー・テクノロジスト」は、ギブスンが電腦空間（サイバースペース）から別方向へ舵を切った《橋》三部作で廃墟像を担う重要な主題となる。同主題形成過程でギブソンは、映画監督の石井聰互（現・石井岳龍）から宮本隆司の写真集『九龍城砦』の存在を教わる（『あいどる』謝辞参照）。その「魔窟的な」廃墟像を表現したギブソン自身の原作脚本による映画『JM』は、脳に埋め込まれたチップのデータを中身も知らず運ぶ「記憶屋ジョニー」を実体を伴う近代的人間とは異なる人間像とし

て提示し、『マトリックス』で描かれるアバターを先駆的に導入した。こうした解説により、「家畜化された人間」の救済を主題とする同作品群の複雑な世界観が明確化され、上述の論考で先生が神学とは別の視点からBLM・白人貧困層（プアホワイト）に言及した所以も理解できた。

建設現場／廃墟像に関する指摘から、報告者は専門とするS・ベケットが描いた未生（≡建設現場）／死（≡廃墟）の交差点たる「子宮墓」を想起した。M4でネオとトリニティがビルの屋上から飛ぶ描写は『ゴドーを待ちながら』のディディの台詞“Hand in hand from the top of the Eiffel Tower, among the first”（ミルトン『失楽園』の引用）を喚起する子宮（マトリックス）再駆動＝復活（レザレクションズ）の表現であり、SF世界とベケットが見事に連結する。先生が『脱領域・脱構築・脱半球』の序文で「批評的想像力が立ち上がった」契機をベケットに見出されたことに勝手乍ら所縁を感じ、たまさか5月にSamuel Beckett Societyでの研究発表のためポール・ド・マンの生地アントワープを訪れた際には、先生の『盗まれた廃墟』と、サウンディングズ第78回大会の講演で研究の出発点がベケットと紹介された土田知則先生の『ポール・ド・マンの戦争』を携行した。現地では某発表のフロアから『盗まれた廃墟』でも論じられたA・ソーカルのhoaxが話題に上り、AIを巡る昨今の喧噪も畢竟、巽先生の論じた上記前史やド・マンのいう修辞学の問題に帰着するだろうと考えた。

会員著作紹介

大野美砂・高尾直知・中西佳世子訳、ナサニエル・ホーソーン著

『おじいさんの椅子の物語 — ホーソーンの描くアメリカ建国史と偉人伝』

国書刊行会、2025年8月25日

<https://www.kokusho.co.jp/np/isbn/9784336077691/>

大野美砂（東京海洋大学）

本書は、ナサニエル・ホーソーンが子ども向けに書いた歴史物語と偉人伝物語を日本語に翻訳したものである。歴史物語は3部構成になっており、17世紀の初期ニューイングランド植民地の歴史をたどった第1部、17世紀末から18世紀半ば頃までのニューイングランドを扱う第2部、主に独立革命の時代を取りあげる第3部に分かれている。第1部は、イギリスのリンカン伯のお屋敷にあったオークの木でつくられた椅子が、伯爵の娘レディ・アーベラが結婚をするときにお祝いとして贈られ、彼女が夫とともに新大陸に渡ったときに、椅子もアメリカに移動するところから始まる。彼女の死後、椅子は植民地時代や独立革命期のさまざまな人物の所有物になり、19世紀はじめには、語り手であるおじいさんがオークションでそれを入手し、4人の孫に椅子に座ったことのある人物や椅子が目撃してきたできごとについて話をするようになる。第4部の偉人伝物語は、目の病気のために暗闇の中で安静にしていなければならない少年と、その兄、友人の3人に、少年の父親が有名な人物の子ども時代の話をする設定になっている。

ホーソーンはアメリカの歴史に強い関心を抱いていたといわれるが、本書からも、彼が驚くほど詳細で正確な歴史の知識をもっていたことがわかる。一方で本書は、19世紀前半の歴史書にしばしば見られるナショナリスティックな語りによって、アメリカの発展を描くものではない。作品の冒頭で、おじいさん

は子どもたちに「教科書には載ってない祖国の歴史や有名な人のこと」をお話しようと提案する（17ページ）。そして、レディ・アーベラというニューイングランドに到着して1か月後に死亡し、植民地の進展にはなんの役割も果たさなかった女性の話を始める。アメリカ史に及ぼした影響を考えれば、多くのページを割いてもよいはずのジョン・ウィンスロップについては、簡単な言及しかない。その後、植民地時代の総督や戦争で功績を残した人物などとともに、アン・ハッチンソン、インディアン、クエーカー教徒、フランス系アカディア人、独立革命期のイギリス王党派など、アメリカの発展の犠牲者や敗北者の経験が描かれる。本書は、アメリカの発展の陰で犠牲を強いられた人びとに向けられた、ホーソーンの温かなまなざしを感じ取るこのできる一冊でもある。



サステナブルな学会を目指して

米田ローレンス正和（白百合女子大学）

今年度より、会報編集長を担当いたします米田です。まずは、前任の杉藤久志先生による長年の御尽力に、心より感謝申し上げます。引き継ぎの際に有益なアドバイスを頂きました。

さて、今回お読みいただきました会報「Soundings Newsletter, Vol. 78」は、記念すべき完全オンライン版の第一号です。以前の会報は手に取りやすいB5サイズでしたが、電子化によって製本が不要となりましたので、通常のA4サイズで作るようにしました。プリントアウトしていただければ分かると思います。一方で、文章のレイアウトは従来の2段組を維持し、私なりに会報の伝統を継承しました。

文章作成ツールの画面がそのまま紙面となる以上、手近なMicrosoft Wordの各種テンプレートでは面白みに欠ける、だからと言って、一からデザインする知識も経験も私にはありません。従いまして、Canvaでフリー素材を漁りに漁って、これこそと思えるテンプレートを見つけました。傍点、イタリック体が使えないなどの制約はありますが、日本語の文章として洗練を感じさせ、且つ、気軽に読めるフォントを選んだつもりです。（都合により、執筆者の了承を得ずに表記を変更した例が僅かにあります。傍点→太文字、イタリック体→アンダーライン、等々、御理解いただければ幸いです。）

巻頭の会長就任挨拶で杉木先生が書かれている通り、会報オンライン化の背景には、当会の財政事情があります。また、他の学会と同様、会長を含む実働の役員の多くは、大学

で勤務する傍らに当会の業務を遂行しています。どの大学でも教育・研究とは直接関係のない学務（会議と事務作業）が格段に増えていることは、役員間の共通認識です。文部科学省が新制度の認証評価で「学部の段階別評価」を導入するならば、教育水準を示す星の数を得るための体制構築で更に忙しくなる未来が目に見えています。（大学側の「徒労感」と「負担感」を「解消」するという改革の「方向性」を公示通り信じたいのですが……）

しかし、それでも我々役員一同は、新会長の言葉にある通り「楽しさ」や「面白さ」を追求できる学会を存続させたいと願っています。他の役員と比べれば、会報編集長の私ができる貢献など微々たるものです。が、英文学研究者という職業柄、一つ一つ積み重ねたworkが実を結んで論文となる喜びを知っています。サウンディングズ英語英米文学会をサステナブルな形に進化させる、その目標に向かって役員の一人として貢献できればと思います。

最後に、表紙のイメージは「サモトラケのニケ」です。当会のエンブレムである「錨」をどこかに入れたかったのですが、私のスキルで綺麗に魅せるには無理がありました。引き換えと言っては何ですが、このニケを役員一同の意志を具現化する勝利のアレゴリーとして、そして、永遠の生命を持つ美のアイデアとして、是非とも御笑覧ください。御多用のなか原稿をお寄せいただいた先生方に、重ね重ね御礼申し上げます。

(1) 会費納入のお願い

本会の運営は皆様からの会費によって成り立っています。まだお納めでない方は本年度会費の納付をよろしくお願いいたします。

<会費納入先>

一般会員6,000円 学生会員4,000円 賛助会員10,000円 * 本会に10年以上所属し、年齢が70を越えた会員は、事務局にご本人より申請があれば、規約により特別会員として会費が免除されます。

- みずほ銀行 新宿西口支店（店番353）普通預金 1293400 サウンディングズ英語英米文学会
- ゆうちょ銀行 〇一九店（店番019）当座口座 0176856 サウンディングズ英語英米文学会
- 郵便振替 00170-3-176856

(2) メールアドレス登録のお願い

メールアドレスをまだご登録いただいていない方は、事務局までお知らせください。個人情報保護の観点から、お知らせいただいたアドレスを事務局からのご連絡以外に使用することはございません。ご登録の際には、件名に「サウンディングズアドレス登録」と入力し、メール本文に、氏名、アドレスをご入力いただき、下記の事務局のアドレスまでご送信ください。よろしくお願いいたします。

<事務局アドレス>

soundings1969@gmail.com

(3) 会員情報更新のお願い

メールアドレス、ご住所、ご所属等に変更がありましたら、この[フォーム](#)で新しい情報をお伝えください。

(4) 当会ホームページ

サウンディングズ英語英米文学会のホームページは、[こちら](#)からアクセスできます。

会報『Soundings Newsletter』第78号（2026）

＜発行人＞

杉木良明

＜編集人＞

米田ローレンス正和

＜発行所＞

サウンディングズ英語英米文学会事務局

〒275-8576

千葉県習志野市新栄2-11-1

日本大学生産工学部実習キャンパス51号館413室

平塚博子研究室内

soundings1969@gmail.com

＜発行日＞

2026年8月6日